風流七小町

五

清水文庫
遠13
659
上

好文堂

遠藤
門 659
帙
巻 5

九海七小町

第一

文弓巻　月編

主への方討切面る妹背の縁

夫人れ公の母ぞ武士の境

命より名を惜む大丸服切

仮りれの夏まつよりくの縁

明治三十八年
九月十一日寄来

第二

重盛が等身の墨染小袖を塔に

古の俊文い破れ口にかゝる苔の岩海

自惚乃ゆゝしき有さまを天狗孫

ちゝへ帰る縁年変成ゆゑ

第三

老木風枝をゆるされ万葉の法

事付まで心ゆるのあはれさ凱旋

男女のたいは大きゝ和ぐわの徳

和国仰ぎかゝ婦人服ゆゑ

(一)夫への方力折切るゝ妹背乃縁

虎とのゝ用ひ捨いもりにて今い嵐のあゝ世の中

し絶ぶ古ゝ分のゝ方めゝい命てゝ情ぐゝ人ゝと

ゝ彩ゝ神路ゝ三本ゝをゝ君ゝ宮ゝ武家ゝ

世ゝかゝゝ人ゝ行ゝ妻ゝ人ゝ一ゝ人ゝ。ゝ来

時ゝ一日ゝ一ゝの男ゝ捨ゝ武ゝ士ゝの

方ゝ力ゝ力ゝ強ゝ勇ゝ士ゝ妹ゝ軍ゝ

方ゝの方ゝ捨ゝ追ゝ来ゝ出ゝ方ゝ

の事ゝ伝ゝ人ゝ。ゝ武ゝ士ゝ

ゝ宮ゝ人ゝ。ゝ来ゝ宅ゝ

ゝ人ゝ。ゝ来ゝ

ゝ捨ゝ

方へ軍をつゞけ越さうと云へいろんざるるぽ町おれて結ぶ
ゆりなとゆうされて軍をつゝ越いろ虎よいゆて大ぜ紙信
しゆうをいい止まとゆうどしゆうの虎ゞ味方にまれいぬ房と新ゆと
ゆのうつゞて迎よ来れしのうゆへ軍をけ付ゞ出后ゆよいゞ
うこれ入いぞゞ来ぬいうて結ぶ紙出信ゞ三ゆ巳ゞの
ゆんぞゞゞ出后ゆ小町ゆぽ出ゞ牙と出信ゞぽ家紙ゞ去ゞ。
ぞいい軍をつよ対四て梅ゞとつひ信ゞ退ゞゞ三ゞとけゞ。
軍をつ三ゞとゞ来れうゞゞゞぞゞゞぽ
ゞゞ内面ゞゞ信ゞゞゞゞゞ虎ゞ紀信
のゞゞ紙ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
出信ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞ

天ちゃのゆもいとうれしゆまちゃのぎくまれも名尾よりてびたもとうけ
てごさるやいに一合の役おもうてゆしゆうとうとうと

を御てこれの表と御ゆこ中後方とて行ひ見て後うこ切て明た
ま人ぺぺこ地ごうさ元ちうぺもいくとけりてぽこれゆるうかり臣ぽ所
ゆかかわとうきごこ間こ手て行るいぺるおいさごやおうこうこらまん。
ゆ男れ元ては入ひてぺぺうあてあくくゆゆ門ごれてつまるくとセーごぽゆう
いあくりれまうすると知あべぺ母ごひょ打とげゆ知ゆもいこすべこた。
まれはゆあいうりとぽもくちこうこうあセー来こて極々れぽのくく
はゆこおりまれゆ男とそこごたこ元ひてのの花花手て戒んと行前い。
おるこて病れと伝りぽまごはゆこあくて無たぽまのくくこのぽつう
ゆはのあてつはぽ来まこを世のくこぽここみるセトさんうぽごた
そとごは戒あ方ぽ知ゆ世ゆうこんもこぽいとんをうごごこうくぽよ
ていゆまそこうこびめごうあいまとうくんと行ゆセー来もゆるあご
うりくゆりてぽくそら方仮のそこんごごぽくの後のゆゆくくんごこう

涙ゆくぺぽわい眼とひきうあ方ゆこ行りてゆうあごいあるうう
元ひてゆこびてはこでけぽうけこれうこ行ひ一元のの
神祇ぽ化のゆこくこれけこぽ行ゆの角後とこう合ゆゆ来ゆたうこと私
ゆ一巴ぽ法来ぽまうこセーわれ一ぽ北分実来こと見ゆ奥一粒ぽ入て一我ぽ結
利とゆぽこてこびれ化行ゆこと中後ぽこつけまんぽうゆうこうこられごずゆごんれ
后れぺ高仏ごさるごゆうと此ゆ所中ぽ元こごのこ来にてぽゆよ
元ゆくゆうゆぽ所とけごゆうこゆゆくゆ様とゆげ強ごうゆゆたうひごそ
ちんぽまうゆうけうゆわれのゆ行後ぽまうこセ出前行ゆうゆ尾ごゆ尾し。
ゆごくとうここぽ行ゆあこうゆこゆ中ゆ方ゆごとぺくこと奥ぺ入ゆ。
ゆわれの前こゆゆぽ尾ごゆうこ行ゆこうぽ后のこゆよ
今ごとここぽゆうこゆ中方に行ゆこれ。ゆわのゆ貝ゆ人感で祈願ごう

結ぶ大い声と叫ぶとひどく虎が面人いそのごまの極悪どろんでいさ
ひとりんでまわる先帝の回れとあさいよりも三位ぱいきたひいて千ゆきもくける宇多にてお尾ぼうちが鈴
へ入て新帝ぱ朝ぱ法せ一度おわらぐわらいぱまぐ学おさぐすとろれば。
軍ちろゆうぱ行ぱ代ぱ人の回がわいはいて働ぱせゆへ牧仏とはく
と御前れぱ。お尾がおこ言へぱ。く結ぶ帝さゆが祇おく拍后の約
米と金銀つてあるやとへばさんぱ后のよ示ぱ大ぐ言ゆう出ていぶ。
えぱ行ぱのおもと付ぱかんへぱ。ぱ生のゆ中に出ぶと結ぐ行れのぱ生ぱ三位
行ぱんと出て上一れの新いおと身いぱ行ぱ代ぱ一れを
回へぱぐさぱぐとへぱ。パテかへとれいぱ及ぐ御契ぱよ遠ぱぐ三の働さ
祝ぐぱう。行ぱ新をとぐげへぱ。ぱ一ぱぐれ三ぱちんとひそれいぱやく
是ぐぱの新前さんぐるとへぱ行ぱんとろ動く会いゆぱぐのようちの

ぱれ行ぱ代ぱとれ再ぐ三へぱ行ぱ代ぱなる男ぱるぱ一れぱ代ぱ
方ぱのぐぐぱ代ぱ代ぱ代ぱたぱれぱひて情ぱ色ぱ二色ぐぐ屋ぐれぱ。
軍ぱ行ぱれ結ぶ結ぶ代ぱの行ぱ前ぱて行ぱれ行ぱ代ぱ行ぱれ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
高ぱの行ぱ行ぱのぱ行ぱ前ぱて行ぱれ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
うあぱ代ぱ結ぶ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
すぱ代ぱのぐぱ行ぱのぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
ちぱぐぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
ぱぱぱぐぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
とぐぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
行ぱぱれ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
軍ぱちぱぱれ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ
軍ぱちぱぱぱぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ行ぱ代ぱ

てくいに首をとりねぢ切ぢ。こはやこれをとる。是ぢもの舞をすと思。一れをとり
戻りさと上めらい。邪ゆる。あ虎が味方の紙ゆへよする物ぞ。宮い我よ
ぬるせ。こけ。出怪我のるさ。やられ。出作り。一刀もつく。三返といひ。それ
ぢ。あ虎。怪ふすう。天ゲトとう。ふ。ぢ。ぐ。ら。ふ。ぢ。ぢ。ぢ

秋さくらま勧請の行者いわしじこ権せうう大物ろくさら八て
仏はまはをさ海ぢげんとぢぜとも人ども虎しめて西伝あせ
西ぢ惜やゆゆうたの功のほくふしろて魔乃の力はどぢのの
伝教よりと巳ゆ人。我勝頃と勝の係とわいとものろと絹のまさ
よりあのりさふつぐさは為。魔風よつまて亦さいぢさあぐの巳
事を地こ事をとけるいわれの伝あれ事集こ種の神宝
紀の巻くこの方れ社け面れるは。ちくぶもうとのくれと伝事
伝う。巻くこれ市鉢へまう。巻行をとうげいりおりて性仁報まとう
ぐひうまて。巻くれ。ぐんぐ。ぐんぐ。ぐんぐ

三　そなる風祝をあつさの方業乃図

紀の名虎博士の伝ようにて魔ふとこと今王物の呼ぶ
あまりくしかはせよとくれわざれば。比叡山の悪僧和尚しかれ
ども釈迦の后月れよたぱさいりかあれと冊縁と抽で義と
つどの祈られ祈力によて清寿とこれおさりけるもろれども大仏造
悪逆日くに釈ることで名虎天狗ぬて人男へうくぐろとさいこと
名虎ようりてかいまれ改まところあるひ牡に釈まと宇興
よりと人なて悪金あまさふあれをもいて養ようげつ
い拙も紀の名虎魔男へとらてふこびつこび改勢とうおこと
りのもなくそのと牡に釈まる名虎が鉄よとこあれて拙をれば。
釈りかにまり海色び地よ二人のまわるおとし去によて牡に釈まと
と土佐の柳へあびまんこ名岸興より入名虎はとうこびぱりとの

宮貴ふへぱる名虎より宇興より出ずれの教
後ふれべ別りとひて釈まを出りせべ牡る釈まを出りて出と
才出釈面海と牡ろうまる金ゆよの出冠とぱづくこと女
まひぱ牡に釈まいそ色まつせまひぱ出とまとこびぱく
九ぐまとくるれるぱまつさく脱ぐこうあせ一まにわびぱ毋
后人九の男出ぱ後のみぎり名虎あり巳いたくへ釈まりぐいり
さあるりこて出釈とこびまを名虎をふ牡万老の後と後編り
くこもぱ中ここれて牡ぱ面いこびを体ぱ名づくと名虎にいこと
めんとおりみべ一日かりとも出名虎へうるさあひぱ金あと釈まと
時悪のりりとこ名さ盛れるりて面りれと名虎を牡出釈
ふこびぱ名虎ここれ邪とい牡ぱりりりこびぱ名虎とこびへ一巳回
海のあるここりるこべ出毋后とまいて出海是とおびりめ

さいんぱうまに考合いそげてこれぬ。ひとりすがの伝と申す
ゑ下すること仕り丸い出あそこげ。世代のゐ仕さるもくしたたまぐ紙
かゐさせ申べいたたの大社百度百司めぐを地ちけ。ぱ蔵源と
あゐさ弘くまるたきいつうとあ。名尾それゐ。こうと合せ。一命
とすて一義よ御ゆてうさ位を。ゆくもちく性に紙をおりを
ついされんこいそのかちるみとのりぴくいぱまるゐ一天下せの
所。とあんこ。性仕乃ゐ申出冠とさんとするに紙の家
えとはゐめ。性仕の者よ出ちゐ。大臣かしてゐうまを
よしひ。天命とちゐ大臣へ。ふく縄とうゐ。ぱ
すいさんかうあ。ゐ。ぐ。こいらうせ。ぱ。ぐ。ちゐとし
べ。冥加とちゐ長へ。ゐ。ぐ。ゐ。こうけわゐ。ぱ紙ゐそ切てうまば。
さすゐふ組御とぱ。ゐ。ゐ。ぱ。ぐ。ちゐとうてうまる。

ところへ。ゐ。ゐ。ゐ